

道の駅について

目次

1 国道 19 号瑞浪恵那道路の概要.....	1
2 道の駅とは.....	2
2.1 道の駅の基本機能.....	2
2.2 道の駅の整備方法.....	2
2.3 近年の動向.....	3

1 国道 19 号瑞浪恵那道路の概要

国道 19 号は、名古屋市を起点とし、岐阜県東部（東濃地方）を通過して長野市に至る、延長約 270 km の幹線道路であり、現在、名古屋市から中津川市までの延長約 90 km のうち、約 75.5 km が 4 車線以上で開通しています。

瑞浪恵那道路は、瑞浪市と恵那市を結ぶ延長約 12.5 km の区間であり、渋滞・事故等の解消や、2027 年予定のリニア中央新幹線の開業時の地域振興に寄与することを目的として都市計画決定された道路です。

本施設は、瑞浪恵那道路に隣接することを予定しており、当該区間となる平成 27 年度に、瑞浪市土岐町～恵那市武並町までの延長 8.2km が事業化し平成 29 年 12 月には着工しています。その後、平成 30 年度に、恵那市武並町～恵那市長島町までの延長 4.3km が事業化するなど全線で事業化されています。



出典：国道 19 号瑞浪恵那道路パンフレット（国土交通省 中部地方整備局 多治見砂防国道事務所）

2 道の駅とは

2.1 道の駅の基本機能

道の駅は「休憩機能」、「情報発信機能」、「地域連携機能」の3つの機能を併せ持つ休憩施設であり、近年ではこれらの基本機能に加え、地域の課題を解決する「地域活性化の核」となる機能や災害時の避難機能を兼ね備えた「防災機能」が求められています。

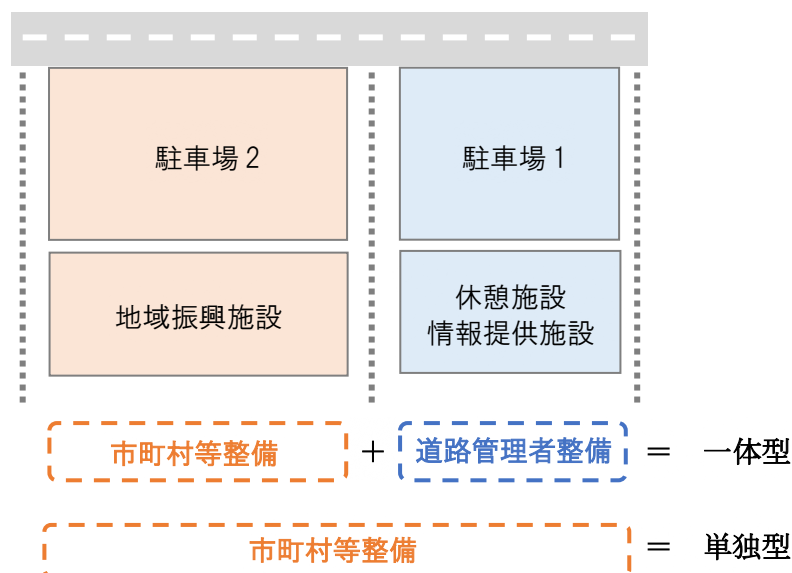
図表 1 道の駅の機能

休 憩	24時間利用の駐車場、トイレ、バリアフリー対応等
情 報 発 信	道路情報、観光情報等
地 域 連 携	文化教養施設、観光レクリエーション施設等
防 災	備蓄倉庫、非常用電源、飲料用貯水槽、避難施設等
地域活性化	6次産業拠点化、地産地消推進、イベント開催等

2.2 道の駅の整備方法

道の駅の整備方法は以下のとおり、市町村等と道路管理者によって整備する「一体型」と市町村等のみで整備する「単独型」の2種類があります。

図表 2 道の駅の整備方法



国土交通省のホームページによると、平成 29 年 4 月時点での道の駅の登録総数は 1,117 駅で、そのうち 56%が一体型で整備されており、単独型よりわずかに多くなっています。

図表 3 整備方法の割合



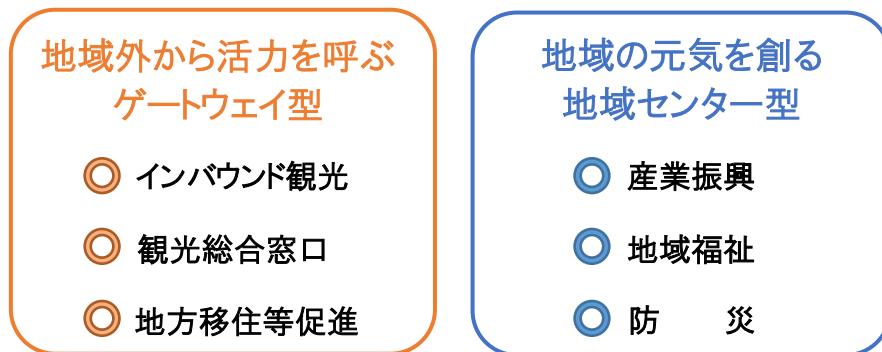
2.3 近年の動向

1) 道の駅の目的施設化

元々、道の駅はドライバーが立ち寄るための休憩施設として整備されてきましたが、近年においては地域創生の拠点として、地域の特産物や観光資源を活かすことで、目的を持って訪れる施設へと進化しています。

こうした動向を受け、国土交通省では地方創生の拠点となる優れた企画があり、今後の重点支援で効果的な取組が期待できる道の駅を、「重点道の駅」として選定し、計画段階から支援を行っています。その支援対象は以下のとおりです。

図表 4 「重点道の駅」の支援対象



ゲートウェイ型	インバウンド観光	外国人案内所、免税店、無料公衆無線 LAN、外貨両替、多言語対応等
	観光総合案内	ビジターセンター機能、地域資源のパッケージ化、体験・交流機会の提供、宿泊予約窓口等
	地方移住等促進	ふるさと納税の情報提供、U・I ターン情報の提供、移住相談窓口、職業体験等
地域センター型	産業振興	地域特産品のブランド化、商品開発、6 次産業化等
	地域福祉	診療所や役場機能などの住民サービスのワンストップ化、宅配サービス等
	防 災	自衛隊等の広域支援部隊の支援拠点機能、非常電源装置や食料供給等のバックアップ機能、住民避難機能等

2) 「重点道の駅」の事例（「パレットピアおおの」岐阜県大野町）

特産品のバラ苗や柿を中心とした産業振興の拠点となる地域センター型の道の駅として、平成 26 年度に「重点道の駅」に選定されています。選定ポイントとしては、町内に点在する観光資源の回遊性を高めるためにサイクリングロードの整備を図り、周辺から広く観光客を呼び込む総合窓口を設置した点や、アクセス利便性を活かした防災拠点機能を整備した点などが挙げられています。

現在は平成 30 年 7 月の開駅を目指し、建設工事が進められています。施設機能は、トイレや情報提供の基本機能の他、物販・飲食施設といった地域振興施設や、子育て支援施設、芝生広場なども併設されています。

3) 「道の駅」第3ステージへ～ 創設から四半世紀、2020年からの新たなチャレンジ～
令和元年11月18日 新「道の駅」のあり方検討会 提言より

(1) 新たなコンセプト



(2) 「2025年」を目指す3つの姿

a) 「道の駅」を世界ブランドへ

- 海外へのプロモーションやプロジェクト展開を国が推進し、「道の駅」は世界ブランドに。多くの外国人が**新たなインバウンド観光拠点**となった「道の駅」を目指し日本へ。
- 「道の駅」では、国や連絡会の支援も受けて、多言語対応やキャッシュレスなど基本サービスを用意。地域の文化体験など地域ぐるみでの受入環境も充実。周辺の「道の駅」や観光施設、風景街道などが連携して周遊観光ルートを創出。
- バス、自転車、レンタカーなど周遊の交通拠点としての役割も発揮し、日本の隅々まで旅行を喚起。多様な交通手段と地域、観光施設情報等がまとめて提供されるサービス（観光 MaaS）の導入も始まり移動が活発化。



b) 新「防災道の駅」が全国の安心拠点に

- 広域的な防災機能を担うため、国等の支援を受けてハード・ソフト対策を強化した「防災道の駅」を新たに導入。地域住民や道路利用者、外国人観光客も含め、他の防災施設と連携しながら安全・安心な場を提供。
- 各「道の駅」でも、地域の防災計画に基づいて、BCPの策定、防災訓練など災害時の機能確保に向けた準備を着実に実施。
- これら「道の駅」の活動情報は、災害時に国、自治体、連絡会等でいち早く共有。関係機関の支援も受けながら、道の駅が地域の復旧・復興の拠点として貢献。

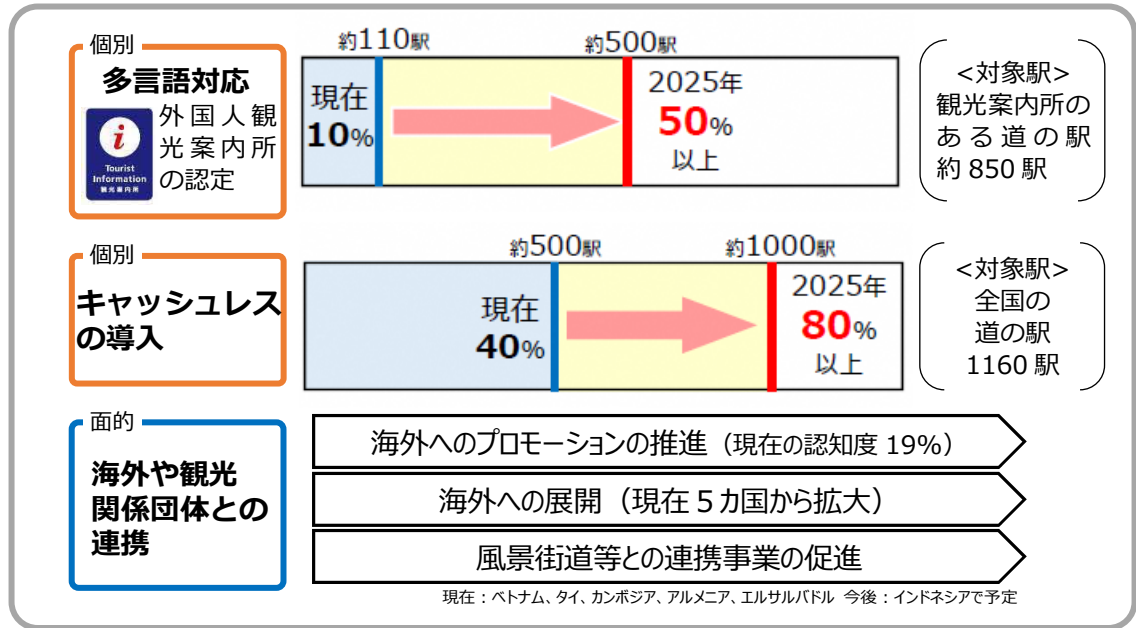


a) あらゆる世代が活躍する舞台となる地域センターに

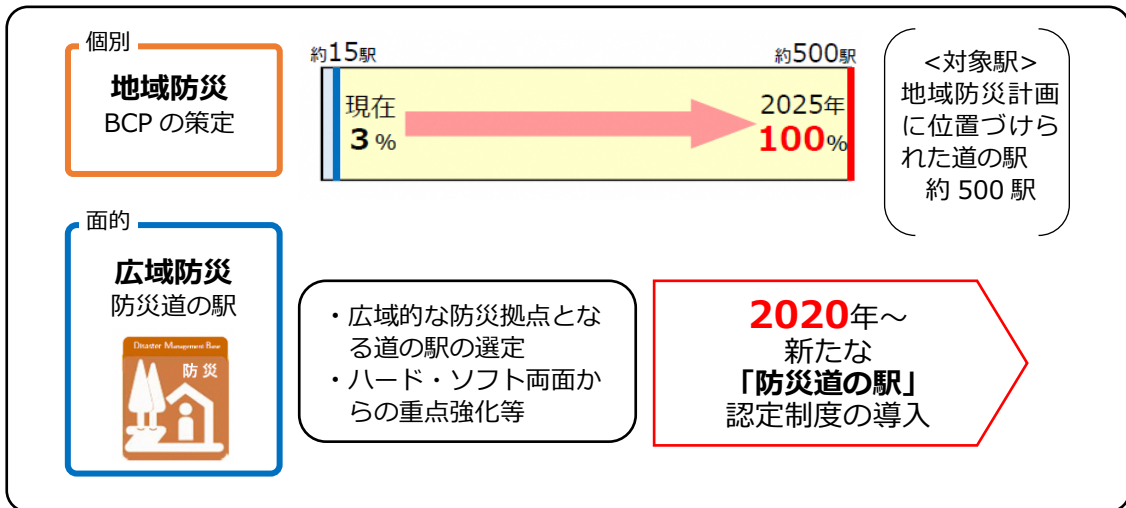
- 「道の駅」を舞台に、地域の課題解決や民間とタイアップした「地域活性化プロジェクト」が、ボランティアを含めた様々な団体との協働や、全国連絡会等が橋渡しを行いながら、全国各地で盛んに実施。
- 地域の子育てを応援する施設の併設や、高齢者の生活の足を確保するための自動運転サービスのターミナルとなるなど、あらゆる世代が「道の駅」で活躍するための環境を提供。
- 多くの学生達が、「道の駅」でインターンとして業務を経験したり、実習に訪れ、地域の特産品をいかした商品開発に取り組み、全国コンテスト優勝を目指して奮闘。



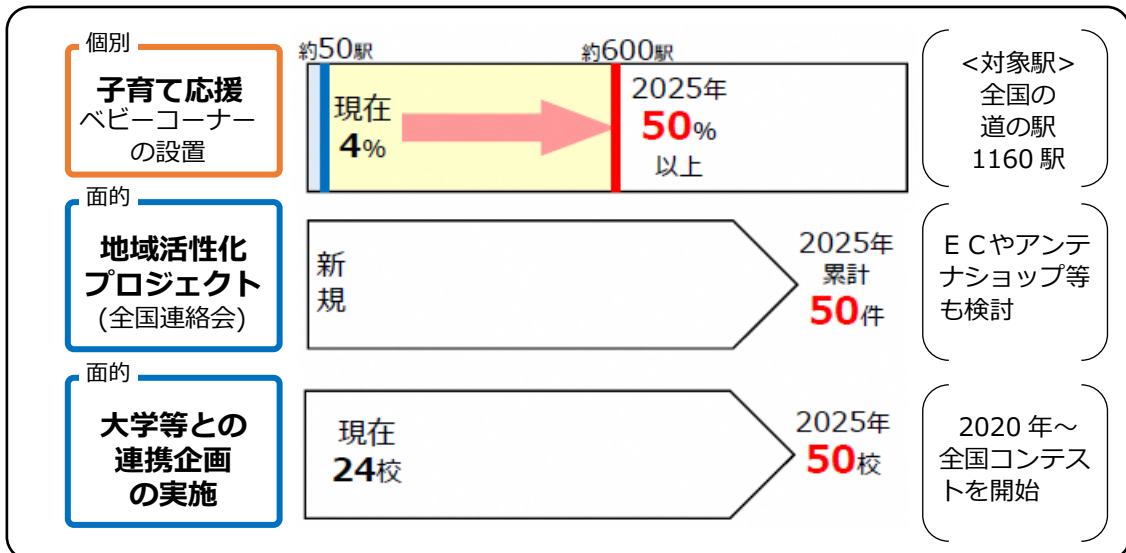
主な取組目標



主な取組目標



主な取組目標



(3) 国等からの支援の充実

- 本提言は、地域社会の更なる発展のため、全国の「道の駅」に期待する今後の役割について、大きな方向性を示したものである。引き続き、「道の駅」の設置者や運営者との丁寧な議論を進め、内容の深化に努めることが重要である。
- 一方、個別の「道の駅」に目を向けると、人手不足、担い手不足の中で、多くの利用者を受け入れるための多くの業務等を日々実施している厳しい実情がある。また、制度創設から四半世紀が経過し、多くの施設でリニューアルが必要となっている課題もある。
- この様な現状において、各「道の駅」だけの努力に委ねるだけでは、「2025 年に目指す姿」を実現することは困難であり、国からの支援等も併せて充実すべきである。

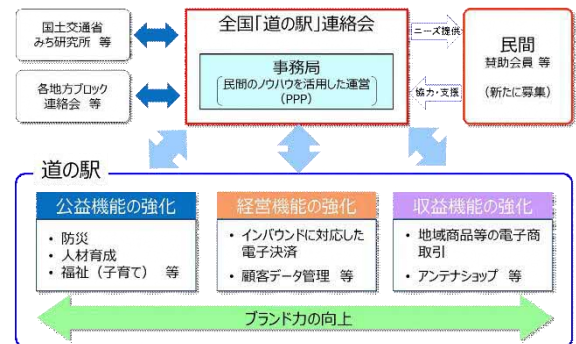
① 「道の駅」及び「道の駅に関連する地域づくり」に対する関係省庁の各種支援制度が、各市町村等で活用しやすい横断的な体制の構築と支援内容の充実

② 「防災道の駅」制度の早期実現と、ソフト・ハード両面からの防災対策に対する重点支援、災害時の各「道の駅」に対する支援体制の強化

③ 完成から年数が経過した「道の駅」のリニューアルに対する支援の充実

(4) 全国連絡会のエージェント機能の強化

- 全国連絡会は、地域ブロック連絡会との緊密な連携の下に、各「道の駅」や地域が抱える課題に対して、民間企業のアイデア・技術を効果的に活用するエージェント機能を十分に発揮するとともに、災害時の対応などの公益的な機能も更に強化し、「道の駅」全体としての発展に大きな役割を果たすよう期待する。



① 民間等との連携による「地域活性化プロジェクト」の促進

② 国等との役割分担を明確にしつつ、災害時の情報収集や被災した「道の駅」に対する支援の強化

③ 「道の駅」の質的向上のため、「道の駅」に関するデータ収集や共有するためのシステム構築や、ブランド力を高める取組みの充実